

平成 22 年 3 月 23 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：18330161
研究課題名（和文） 前近代日本における識字力の分布および展開過程に関する研究
研究課題名（英文） A historical research on distribution and expansion of literacy in pre-modern Japan
研究代表者
大戸 安弘（OHOTO YASUHIRO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：90160556

研究成果の概要（和文）：本研究においては、前近代日本において、識字能力がどのように分布していたのか、またそれがどのように展開しつつあったのかについて、多角的に事例研究をおこなった。研究は共同研究者がそれぞれ分担する領域に関する研究とその報告をおこない、研究情報の交換と、研究交流をおこなった。この結果、古代官僚制下における貴族の識字に関する状況をはじめとして、中世末期の特定の都市および村落における識字の状況、および明治期における学校教育が、当時の識字状況に与えつつあった影響など、前近代から近代初期にいたるまでの多様な識字状況が明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：In this research Ohto Yasuhiro and his collaborators did some case studies from diversified standpoints on the distribution and expansion of literacy in pre-modern Japan. Each member did case study on their field and made a presentation. We made sharing information and research exchange by these presentations. This research is now tracing situations of literacy in pre-modern Japan, for example, literacy of aristocrats in ancient Japan, literacy rates of some cities or villages in the end of medieval Japan and the effect of modern school system to literacy rates in Meiji Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|------------|-----------|------------|
| 2006 年度 | 3,900,000 | 0 | 3,900,000 |
| 2007 年度 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |
| 2008 年度 | 3,600,000 | 1,080,000 | 4,680,000 |
| 2009 年度 | 3,600,000 | 1,080,000 | 4,680,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 14,300,000 | 3,120,000 | 17,420,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：前近代 識字 識字率 民衆教育 花押

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する当初における、前近代日本の識字状況に関する研究状況は、本研究に先行する科学研究費補助金・基盤研究（B）

「前近代日本における識字状況に関する基礎的研究」における研究を除けば、組織的な研究はおこなわれておらず、この研究および、本研究に参加している共同研究者が、数少な

い事例研究をおこなっているにとどまっていた。本研究は、文字教育の実際の普及度を考察する基礎的な作業として、前近代日本の識字状況に対する本格的な組織的研究の第二弾と位置づけられるものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、前近代日本における識字力の分布状況、および識字力の普及過程について、実証的に解明することである。識字力を定量的に観測することはもとより、日本における文字体系の歴史的な性格をはじめ、文字教育の教材およびそのシステム、文字に対する人々の受け止め方など、間接的な状況についても把握することを目的としている。

3. 研究の方法

研究の方法としては、識字力の定量的な測定と、文字の普及に関する間接的な状況把握のふたつの手法を採用した。それぞれの具体的な研究手法は以下のとおりである。

(1) 識字力の定量的な測定

①花押の収集とその分析

前近代日本において、識字力の分布状況がある程度定量的に観測しえる資料は花押である。とくに、中世末期から近世初頭にかけては、村掟や人別改帳などに、全戸主あるいは全村民の花押が記載される資料がしばしばみられ、これらは、前近代日本において、定量的に識字率を測定しえる数少ない資料のひとつである。西洋社会においては、教会に伝来している膨大な婚姻署名が、識字率の測定に使用されているが、日本においては、このような体系的な自署資料は残っておらず、わずかに伝来している、これらの花押、とくに民衆花押を収集して、これを分析する以外に、識字率を測定する有力な方法はないといってよい。本研究に先行する基盤研究

(B)「前近代日本における識字状況に関する基礎的研究」においては、もっぱら花押を収集することを目的として、多数の花押資料を実際に収集してきた。本研究においては、このような実績の上に、近江・越前・長崎などの具体的な地域に関する、より詳細な花押資料の分析と考察をおこなった。

②明治期の識字率調査に関する分析

本研究の主たる研究対象は、前近代日本における識字力であるが、前述のごとく、これを定量的に把握することはきわめて困難でもある。そこで、研究対象を明治期にまで拡大し、この時期にいくつかの県が実施した識字率調査についても研究をおこなった。6歳以上の全住民を対象とした自署能力に関する調査結果であるこれらのデータには、学校制度導入以前に子ども期を過ぎた膨大な住民の識字力が反映しており、特定の地域に関する同時代の包括的な識字率のみならず、

近代以前における識字状況を推測するうえでも、きわめて貴重なデータであるといえる。これらのデータを使用して、職業・身分比率と識字率の関係、世代ごとの識字率や世代間の識字率の関係、就学率と識字率の関係など、多面的な角度から識字状況を分析した。これにより、近代以前の識字状況に加え、近代学校が、どのように識字状況を変容させていったのかを考察した。

(2) 識字に関する間接的な状況把握

①日本における書記言語の特質

日本における識字の分布と普及にかかわって、もっとも重要な社会的条件は、文字(書記言語)そのものの在り方である。日本においては、日本語とまったく構造の異なる中国語の文字を使用しつつ、これに仮名を混用して、次第に和文化的という方式によって文字が普及していった。このことが、日本の識字とその教育の在り方にどのような影響をもたらしたかについて、研究をおこなった。

②諸史料における識字言説

種々の歴史史料には、識字に言及する記事も少なくない。「御無文字」や「文盲」のようなものである。このような言説は、識字力の在り方を直接示すものではないが、状況証拠としては有力な史料といえる。本研究においては、このような言説の収集もおこなわれた。

③往来物と識字

往来物は前近代日本における文字教材の基本的な形式であった。したがって、識字状況を知る上では、これについての研究も不可欠である。研究分担者のなかには、往来物の研究を専門とする者がいるので、往来物がどのような識字をもたらすのかということについての研究をおこなうこととした。

④前近代の教育機関と識字

近世以後になれば、識字力の形成のための教育機関が無数に設立されていった。したがって、これらの教育機関がいかなる識字力をもたらしていたかは、識字状況の把握にとっても重要である。研究分担者のなかには、これらの教育機関の研究を専門としている者も少なくないので、それぞれがおこなった事例研究について、識字力の形成という側面から再検討をおこなうこととした。

⑤ジェンダーと識字

前近代日本の識字においては、ジェンダーの影響力はきわめて強い。そこで、とくに女性に注目して、女性にとっての識字とはいかなるものであったのかに注目してみることにした。

(3) 研究発表と研究交流

本研究に先行する基盤研究(B)「前近代日本における識字状況に関する基礎的研究」においては、特定の地域の調査・史料収集を共

同でおこなうという研究手法を採用したが、本研究においては、基本的に、研究の分担をおこなった上で、それぞれの研究者が、それぞれの得意とする領域で事例研究をおこなうこととし、その研究内容を発表することにより、研究交流をおこなうことを主な方法とした。研究期間中、毎年4回程度の研究会が開催された。

(4) 海外の研究者との研究交流

海外における識字研究者との交流をおこなうことも、本研究の重要な目標とした。このため、米国インディアナ大学のリチャード・ルビンジャー教授と緊密に連絡を取り合い、同大学においてカンファレンスを開催した。

4. 研究成果

本研究によってもたらされた研究成果は、後述の著書・論文・学会発表などに反映しているが、このほか、本研究のまとめとして2010年度内に刊行される予定の著書『日本におけるリテラシーの歴史』（仮題）に集大成されることとなっている。

ここでは、これまで明らかになった知見の概要を、「研究の方法」において記述した順に示しておこう。

(1) 識字力の定量的な測定

まず、識字力の定量的な測定の方法論に関するものとして、木村政伸「前近代日本における識字率推定をめぐる方法論的検討」が詳細な検討をおこなった。花押や入れ札など、多様な史料がその可能性を有していることがあきらかにされている。本研究では、このうち、花押と明治期の識字率調査とを、主要な研究対象として設定された。

①花押による測定

民衆の花押は、中世末期から近世初頭にかけて多数出現し、17世紀中葉には印鑑に取って代わられることにより、急速に消滅していった。また、民衆花押の残存率は、村落としての自立性とも関係しており、地域的な残存率の差異が大きい。大まかに言って、畿内周辺地域に多く伝来されている。このうち、本研究においては、近江地域と越前地域の二箇所について、具体的な事例研究がおこなわれた。この結果、村落においては、花押を記す人々は特定の階層に集中していることなどが判明した。他方で、和紙製造と販売にかかわる商業的な地域では、村落においてさえ、かなり広範囲に花押記入者が存在していることも判明し、すでに研究分担者である木村政伸などが明らかにしている京都や長崎などにおける近世初頭の高い花押率が、畿内周辺の村落にもある程度広がっていることが確認された。これらの成果は、今後、刊行される予定である。

②明治期の識字率調査の分析結果

明治期の識字率調査に関しては、今後とも種々の研究の可能性が存在しているが、本研究においては、山口県と岡山県の識字率について、具体的な事例研究がおこなわれた。その結果は、後述の著書（八鍬友広共編：『識字と読書』）に明らかにされている。ここでは、職業比率と識字率の相関関係が統計的に実証された。また就学率は、明治初期においては識字率・職業比率のいずれとも相関関係を有しておらず、独自の展開をみせていることも明らかになった。しかし明治中期になると、次第に就学率の影響力が増し、識字率は、職業比率とよりも、就学率と強い関係を有するようになっていく。とくに若年層においては、この傾向が顕著であり、種々の社会的条件を押しつけて、就学が識字率と決定的な関係になっていく過程が、具体的に観測された。

これらの事例研究において、とくに重要な測定結果は、世代間の識字率のきわめて強い相関関係である。岡山県における郡ごとの識字率調査から明らかになった事実である。とくに、30歳以上の世代と14歳-30歳世代との相関係数は0.9ときわめて高く、この両世代が、識字という点で、きわめて類似した特性を有していることが判明した。すなわち、先行世代が識字力を有する場合、後継世代も識字力を有し易いという特質である。このような特質は、近世における「家」の在り方と強く関係するものと推定される。つまり、他のさまざまな職業能力と同様に、識字力も家において継承されるものであったということである。このような世代間関係は、しかし次第に就学によって弱化していき、やがては就学率こそが、決定的な要因となっていくのである。以上は、前近代における識字の在り方が、近代学校によって変容していく過程を、具体的に把握したものといえる。

(2) 識字に関する間接的な状況把握

識字に関する間接的な状況把握については、当初の計画以上に、多様な研究が展開された。その一部は、後述の「主な発表論文等」に掲載されているが、ここでは、特徴的な点のみを報告することとする。

まずは、宗教と識字の関係である。西洋においては、宗教のもたらす識字への影響力の大きさが解明されているが、日本においては、両者の関係は依然として不明である。大戸安弘「仏教教育としての遊行の位相」は、遊行僧の教育活動を分析することによって、両者の関係に迫るものである。

往来物に関しては、天野晴子「江戸時代の往来物にみられる消費・商品をめぐる情報」が、往来物のなかにみられる消費や商品の情報を分析して、当時の人々の有していた消費・商品の語彙知識の一端を明らかにしている。同じく天野晴子「江戸時代の女子

教育について一往来物を通してみる女性の生活と教育」は、往来物に描かれた女性の生活から、上層以上の女性に期待された教養の内容を明らかにした。この論文は、識字とジェンダーの関係を分析したものである。

八鍬友広「往来物のテキスト学」(『知の伝達メディアの歴史研究』)は、日本における書記言語と文書そのものの特質から、往来物の成立する必然性を明らかにしている。

識字にかかわる教育機関に関連した研究も進展した。太田素子「『継声館日記』にみる近世在郷町の識字状況」は、郷校「継声館」が形成していた識字力の内容についてあきらかにしている。

鈴木理恵「手習塾の学習環境—近世後期の絵画史料分析を通して—」「近世後期における読み書き能力の効用—手習塾分析を通して—」は、近世の識字力形成の基本的形態であった手習塾とそれが形成した識字力の具体相について明らかにしたものである。

梅村佳代「寺子屋と筆子中」(『結衆・結社の日本史』)は、手習塾に入門した人々が、ひとつの結社を形成していたことを明らかにしており、このように識字が、身分制とは異質の集団を形成しつつあったことは、識字の有する社会的な規定力を示すものである。

(3) 研究発表と研究交流

前述のように、本研究においては、各自の事例研究を発表することにより研究交流をおこなってきた。その内容は、上述の成果に反映しているが、研究の交流によって、人間がおこなう文字を使用した諸活動を、単に「識字」ととらえるのではなく、一定の知識や技能・文化などが、一定の集団に共有すべきものとされている状況を「リテラシー」と位置づけ、これの分析・考察へと進展すべきであることが、次第に確認されていった。

(4) 海外の研究者との研究交流

2006年11月1日と2日の両日にわたって、米国インディアナ大学において、国際カンファレンス INTERNATIONAL CONFERENCE ON THE HISTORY OF POPULAR LITERACY IN JAPANを開催した。本研究に参加する研究代表者および研究分担者(当時)の全員が研究報告をおこなったほか、米国側からルビンジャー教授およびエリソン教授の研究報告がおこなわれ、双方の研究交流をおこなった。

このカンファレンスの内容はインディアナ大学の以下のホームページに掲載されている。

<http://www.indiana.edu/~easc/publications/crjeh.shtml>

また、New Materials for the Study of Literacy in History: Report of the Indiana

Conference on Literacy in Japanese History というレポートが作成された。

なお、ルビンジャー教授の著書 *Popular Literacy in Early Modern Japan* の邦訳を、本研究の研究分担者である川村肇がおこない、『日本人のリテラシー』という邦題で刊行された。

ルビンジャー教授とは、教授が来日した2008年4月12日にも研究打ち合わせをおこなうなど、研究の交流が継続している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計11件)

- ①鈴木理恵、手習塾の学習環境—近世後期の絵画史料分析を通して—、教育学研究紀要(CD-ROM版)、査読無、第55巻、2010
- ②川村肇、西周の近代—『百一新論』を読む—、獨協学園資料センター『研究紀要』、査読無、第2号、2010、3-21
- ③木村政伸、前近代日本における識字率推定をめぐる方法論的検討、筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報、査読無、第20号、2009、81-94
- ④八鍬友広、小千谷学校「学校日誌」を読む—郷学と小学校のあいだで—、書物・出版と社会変容、査読無、第6号、2009、93-107
- ⑤太田素子、「継声館日記」にみる近世在郷町の識字状況、和光大学現代人間学部『現代人間学部紀要』、査読無、第2号、2009、163-176
- ⑥鈴木理恵、近世後期、神職の在京生活と交遊、広島大学大学院教育学研究科紀要、査読無、58号、2009、17-26
- ⑦天野晴子、江戸時代の女子教育について—往来物を通してみる女性の生活と教育、生活文化研究所年報(ノートルダム女子大学生活文化研究所)、査読無、第20輯、2008、3-20
- ⑧天野晴子、江戸時代の往来物にみられる消費・商品をめぐる情報、転換期の消費者教育(日本消費者教育学会関東支部25周年記念誌)、査読無、2008、21-26
- ⑨大戸安弘、仏教教育としての遊行の位相、教育学論集、査読無、第3集、2007、37-66
- ⑩梅村佳代、近世後期~明治初期但馬地域の教育の歴史的考察—出石藩の藩校から「学制」期の小学校創設までを対象として—、奈良教育大学紀要、査読無、第56巻1号、2007、1-12
- ⑪鈴木理恵、近世後期における読み書き能力の効用—手習塾分析を通して—、社会言語学、査読無、VI、2006、111-126

〔学会発表〕(計6件)

- ① 大戸安弘、前近代教育史上における日本仏教の展開—識字力形成の側面を中心に—、韓国教育史学会 2009 年度秋季学術大会、2009 年 11 月 28 日、光州教育大学
- ② 川村肇、フランス近代教育成立史研究との対話—天野知恵子『子どもと学校の世紀』から学ぶ—、教育史学会第 53 回大会コロキウム、2009 年 10 月 11 日、名古屋大学
- ③ 太田素子、人間形成の社会史における<家族>—「家」の教育・家庭教育・共育ネットワーク?、教育史学会第 53 回大会シンポジウムシンポジウム、2009 年 10 月 10 日、名古屋大学
- ④ 八鍬友広、明治維新期における郷学に関する一考察、全国地方教育史学会第 32 回大会、2009 年 5 月 24 日、北海道教育大学函館校
- ⑤ 木村政伸、史料が開く近世教育史の可能性、日本教育史研究会サマーセミナー、2008 年 8 月 5 日、立教大学
- ⑥ Ohta Motoko、The Childhood in Autobiographies Written in Tokugawa Era Japan; Diversity and Decline of Human Building in Community、The II International Conference on Community Psychology on Risbor, Portogy、2008.6、Lisbon

〔図書〕(計12件)

- ①根ヶ山光一、柏木恵子、太田素子、他、有斐閣、子育ての進化と文化、2010
- ②辻本雅史、鈴木理恵、八鍬友広、他、思文閣出版、知の伝達メディアの歴史研究—教育史像の再構築—、2010、300、71-96、97-130
- ③松塚俊三、八鍬友広共編、昭和堂、識字と読書—リテラシーの比較社会史—、2010、360、1-16 (共同)、69-95、356-358
- ④齋藤晃、八鍬友広、他、人文書院、テキストと人文学、2009、287、103-116
- ⑤梅村佳代、他、三重県男女共同参画センター、三重の女性史、2009、285、5-35、42-51、63-65
- ⑥小山静子・太田素子共編、藤原書店、「育つ・学ぶ」の社会史—「自叙伝」から—、2008、299、24-79、285-288
- ⑦片桐芳雄、木村政伸、他、八千代出版、教育から見る日本の社会と歴史、2008、240、17-57
- ⑧川村肇、柏書房、日本人のリテラシー、2008、322
- ⑨辻本雅史、八鍬友広、他、放送大学教育振興会、教育の社会史、2008、249、29-54
- ⑩太田素子、藤原書店、子宝と子返し／近世農村の家族生活と子育て、2007、428
- ⑪太田素子、鈴木理恵、八鍬友広、他、日本

図書センター、教育史研究の最前線、2007、360、213-224、231-236、256-264
⑫福田アジオ、梅村佳代、他、山川出版、結衆・結社の日本史、2006、347、97-107

〔その他〕

ホームページ等

①インディアナ大学国際カンファレンス報告書、New Materials for the Study of Literacy in History: Report of the Indiana Conference on Literacy in Japanese History、2008、
米国インディアナ大学の以下の URL に掲載、

<http://www.indiana.edu/~easc/publications/doc/CRJEHVolume3.pdf>

研究代表者および研究分担者のレポートタイトルは以下のとおりである。

Written Characters in Ancient Japan: The Use of Kanji for National Unification (Suzuki Rie)

The Development of Buddhism and Literacy in Japan (Ohta Yasuhiro)

The Ability to Sign by Farmers of the Ōmi Region from the Fourteenth to the Early Seventeenth Century (Umamura Kayo)

The Calculation of Literacy Rates Using Ninbetsuchō with a Focus on Kaō (Kimura Masanobu)

Ōraimono in Women's Literacy and Education in the Edo Period (Amano Haruko)

How Children Learned to Read and Write in Eighteenth- and Nineteenth-Century Japan (Ohta Motoko)

Report on Surveys of Literacy Rates in Meiji Japan (Yakuwa Tomohiro)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大戸 安弘 (OHOTO YASUHIRO)

筑波大学・大学院人間科学総合研究科・教授

研究者番号：90160556

(2) 研究分担者

太田 素子 (OHOTA MOTOKO)

和光大学・現代人間学部・教授

研究者番号：80299867

木村 政伸 (KIMURA MASANOBU)

筑紫女学園大学・文学部・教授

研究者番号：70195379

天野 晴子 (AMANO HARUKO)

日本女子大学・家政学部・教授

研究者番号：50299905

川村 肇 (KAWAMURA HAJIME)

獨協大学・国際教養学部・教授

研究者番号：60240892

鈴木 理恵 (SUZUKI RIE)

広島大学・教育学部・准教授

研究者番号：80216465

八鍬 友広 (YAKUWA TOMOHIRO)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：80212273

梅村 佳代 (UMEMURA KAYO)

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10085318

(H19→H20：連携研究者)

(3)連携研究者

なし